九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Serum Uric Acid as a Risk Factor for Chronic Kidney Disease in a Japanese Community - The Hisayama Study -

髙江, 啓太

https://doi.org/10.15017/1931822

出版情報：九州大学, 2017, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（別紙様式２）

氏　　名	髙江　啓太
論　文　名	Serum Uric Acid as a Risk Factor for Chronic Kidney Disease in a Japanese Community - The Hisayama Study -
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　江藤　正俊 副　査　　九州大学　　教授　　萩原　明人 副　査　　九州大学　　教授　　外　　須美夫

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

血清尿酸値の上昇が慢性腎臓病(CKD)のリスクを上昇させることが徐々に明らかになってきている。しかしながら一般住民において血清尿酸値上昇と腎機能障害、アルブミン尿発症との関連を別々に検討した研究は少ない。申請者らは CKD のない 40 歳以上の日本人一般住民 2,059 名を 5 年間追跡した。CKD は腎機能障害(推算糸球体濾過量 60 ml/分/1.73m^2 未満)またはアルブミン尿(尿中アルブミン/クレアチニン比 30 mg/g 以上)と定義した。血清尿酸値を 4 分位(≦4.0、4.1-4.9、5.0-5.8、≧5.9 mg/dl)に分け、CKD 発症のオッズ比を計算した。その結果、追跡期間中、396 名が CKD を発症し、その内 125 名が腎機能障害、312 名がアルブミン尿であった。多変量調整の結果、血清尿酸値の上昇とともに、CKD の発症リスクは上昇した(オッズ比 1.00 [基準](≦4.0 mg/dl)、1.21 [95%信頼区間 0.84-1.74](4.1-4.9 mg/dl)、1.47 [1.01-2.17](5.0-5.8 mg/dl)、2.10 [1.37-3.23](≧5.9 mg/dl)。同様に多変量調整の結果、血清尿酸値は腎機能障害(オッズ比 1.00 [基準]、2.30 [1.10-4.82]、2.81 [1.34-5.88]、3.73 [1.65-8.44])、アルブミン尿(1.00 [基準]、1.12 [0.76-1.65]、1.35 [0.90-2.03]、1.81 [1.14-2.87])のいずれの発症リスクとも正の関連が見られた。結論として日本人一般住民において、血清尿酸値上昇は腎機能障害およびアルブミン尿の危険因子であることを示した。

本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったがいずれについてもほぼ適切な解答を得た。よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。

なお、この論文については共著者多数であるが、予備調査の結果、本人が主導的役割を果たしていることを確認した。